
涼風爽快

愛田美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼風爽快

【Nコード】

N4611D

【作者名】

愛田美月

【あらすじ】

一ノ瀬涼が経営する、一ノ瀬探偵事務所に小さな三つ子の兄弟がやって来た。彼らは涼を『お父さん』と呼ぶ。戸惑う涼のもとにきた、一本の電話。それは昔付き合っていた彼女、美紗子からの電話だった。美紗子は涼に一つの依頼をする。それは「私を探して」というもので……。

第一話 小さな訪問者

あの日は朝からついていなかった。

あの日の事を思い起こすたび、必ずこのフレーズが頭をよぎる。

その日の朝、俺は日課になっている朝の散歩を楽しんでいた。歩いているとだんだん喉が乾いてくる。いつもなら途中でコンビニに寄るのだが、今日はそのコンビニが改装の為に、閉まっていたのだ。ついてないなあ。と、思ったちょうどその時。自動販売機が視界に入った。

前言撤回。ちょっとついてるかも。そう思っただけ俺は自動販売機に近寄った。

かなり薄汚れた、余り見ないメーカーの自販機だった。一瞬買うのを躊躇したが、喉は乾きを訴えている。俺はその欲求に負けて無糖のコーヒーを買うことに決めた。

小銭を入れ、ボタンを押す。確かに押したはずだった。

大きな音をたてて落ちてきた缶を見て、俺は驚いた。

その缶は俺が買おうとしていたコーヒーではなかった。それどころかこんな名前の飲料は初めて見た気がする。

その缶にはでかでかこう書かれていた。

『はちみつあんこレモン風味』

はちみつあんこ？ はちみつあんこって何だ？ 俺は味を想像しようとしたが、出来なかった。物凄く甘いだろうということは想像できるが、レモン風味って一体……。

爽やか、なのか？

俺は喉の渇きも忘れ、その謎の缶ジュースについてあれこれと考えていた。だが、決して飲もうとは思えなかった。

考えているうちに、自宅のある雑居ビルの前に着いていた。

俺の住居は仕事場も兼ねている。雑居ビルの二階にその仕事部屋はあった。外からビルを見上げると、窓に一ノ瀬探偵事務所と大きく書かれているのが見える。

一ノ瀬とは俺の苗字であり、一年前までこの事務所の所長をしていた祖父の苗字でもあった。

俺は訳があり、中学の頃から親元を離れ、祖父と一緒に暮らしてきた。その祖父の後を継いだのがちょうど一年前の春だ。

そして今、祖父は引退し、俺の実家のある田舎へと引っ越していった。

俺としてはまだまだ祖父に教えを請いたかったところだが、そうは言っていられない。何せ祖父はもう八十を過ぎているし、いつまでも甘える訳にはいかないのだ。俺だってもう二十六歳。立派な大人なのである。

ビルの一階は喫茶店になっている。喫茶コキアという名のその喫茶店のマスターとは、中学からの友人だ。

朝出かけるときには準備中の札がかけられていたが、今はもう開店しているようだ。

俺は少し顔でも見ようかと、店に入った。

「ああ、お早う。一ノ瀬」

「おお、お早う」

この店のマスターで俺の友人、古木亮は笑顔で俺を出迎えた。まあもつとも古木は少し細い目のせいで、いつも笑ったようなやさしい顔に見えるのだが。

俺はカウンターのほぼ中央のイスに腰掛けた。ここが俺の定位置である。

「今日は何する？ 朝食まだなのか」

「いや、朝食はもう食べてきた。悪いけど。コーヒー頼むよ」

「ハイよ」

一つ、返事をする、古木は準備に取り掛かった。その時店の奥から、若い女性が姿を現す。

「亮君ごめんねえ。寝坊しちゃった」

古木は手を止め、その女性を振り返った。

古木の顔が途端ににやける。寄ってきた女性の手を取って口を開いた。

「いいんだよお、アキちゃん。昨日は引越して疲れてたんだし」

「それは、亮君も同じでしょう、ってあら、お客さま？」

いきなりの出現とこのムードについていけず、黙っていた俺に、女性は気づいたようだ。

「なあ、古木。彼女は一体……」

聞きたいことは山ほどあったが、とりあえず俺はそれだけ口にした。

「ああ、ゴメンよ。まだ紹介してなかったね。彼女は……」

「はじめまして。私、古木の妻の古木亜希です。きや、言っちゃった」

「やだなあ。照れるじゃないかアキちゃん」

「ちよつと待て」

俺はまたイチヤイチヤし始めた二人の前に手を上げて、会話を中断させる。

「古木、お前いつの間に結婚したんだ」

「あー、お前に話してなかったのは悪かったよ。でも俺もアキちゃんもこんなに早く結婚することになるとは思わなくてさ」

「一週間前籍を入れたばかりなんです」

俺は眩暈を感じた。ついこの間までフリーだったはずの古木が、いきなりどうやったら、こんなに若くて美人の妻が出来るのだ。

「実は私妊娠しちゃって、それを知った両親が怒って亮君の家に押しかけたんです。で、亮君ったら必死の形相で、結婚します。今すぐ、とか言っちゃって、婚姻届とりに役所まで走ってったんですよ。」

私と両親を置いて」

「はあ」

「父がその亮君の熱意に感動して、結婚許してくれて。で、昨日は引越して、亮君の家に荷物運んだりして大変だったんです」

「だから、つまり、あれか。お前らはもともと恋人同士だったわけだな」

「うん三ヶ月前から」

「ほー、それを俺に隠してたわけだ」

恨みがましく言つてやると、古木は慌てたように腕を振った。

「や、別に隠してたわけじゃないよ。言い出せなかったんだよ、この前まで仕事でほとんど来なかったじゃないか。来てもコーヒー飲んですぐ出て行っちゃうし」

古木の言い訳に俺は唸った。まあ、確かにこの三ヶ月、妙に依頼が多くて大変だった。

それは認めるが、ううん。なんとも羨ましい話である。

アキさんが裏に戻ったあと、俺の前でカップを磨いている古木に声をかけた。

「あーあ。まさか古木に先越されるとはな。意外だったよ」

「俺もだよ。おまえモテるのに、彼女つくらないしさ。……いい加減、前の彼女のことは忘れて、新しい恋みつけれよ。俺みたいにさ」

からかい半分の言葉に、真面目に返されて、俺は飲んでいたコーヒーを噴出しそうになった。古木の言う彼女が誰か分かって、俺は古木を軽く睨んだ。

「そんな顔すんなよ。本当のことだろう。彼女が逃げた後、追いもしないでうじうじいまだに未練残してさ。見てるこっちが辛いよ」

「うるさいな。俺のことなんてどうでもいいから。もっと他に話す事はないのか」

「あるある、あのさ……」

古木は目尻を下げ、締まりない笑顔を作ると話し始めた。その内容はもちろん新妻のことで、俺はこの後散々ノロケ話を聞かされた。

そのせいか、事務所に戻った時はぐったりしていた。買ったまま持て余していた『はちみつあんこレモン風味』の缶を事務所の机の上に置き、部屋でスーツに着替えた。

それにしても古木の奴がどうして、あんな可愛い女性と結婚できるんだ。やっぱり納得できない。聞くところによると彼女はまだ十八で、高校を卒業したばかりだという。

探偵よりも喫茶店のマスターの方が女性にモテるものなのか……。俺など高校の時に付き合っていた彼女と別れて以来、一度も女性とお付き合いなどなかったと言うのに。

木で造られた重厚な机の前にイスを引いて座り、俺はぼーっと電話が鳴るのを待った。

この間まで嘘のように仕事が舞い込んできたのに、今日はほとんど電話が鳴らない。ただ座っているだけだと、眠くなってくる。昼の休憩を十二時に定めているが、まだ後一時間半もじっと座っていないければならない。

俺は電話を留守録にして、机の前にあるソファーに寝転んだ。このまま昼寝でもしようと思ったのだ。人のノロケ話を聞くのは、どうやら随分疲れるものらしい。

うとうとし始めた俺の脳に、一つの映像が浮かび上がった。誰かが階段を上ってくる。それも複数。三人位だろうか。

俺は眠くて閉じた目を無理やり開け、扉へと向った。客が来る。

俺はそう確信していた。俺にはわかるのだ。俺にはそう、人とは少し違った能力がある。そして今のもその能力の一つだ。

まあ、日常生活で使って得することなど滅多にない能力である。せいぜい人を驚かせる事くらいにしか使えない。

ドアに耳を当てると、やはり複数の足音がこちらに向ってきている。

だがこの足音は大人のものではないようだ。やけに軽い音が近づいてくる。

俺はドアを開けた。いきなり開いたドアに、驚いた様に固まった三人の小さな顔があった。やはり子どもだった。小学校低学年位、いや幼稚園児だろうか。彼らは一様に驚き顔のまま、俺を見上げていた。だが俺はその子ども達よりも、さらに驚いた顔をしていたに違いない。

俺の前に立つた三人の子ども達は三人が三人とも同じ格好、同じ顔をしていたのだ。

暫く互いに見つめあった後、三人の子どもの中の一人が急に声を上げた。

「お父さん」

子どもの声に反応する間もなく、残りの二人も同じようにお父さん、と叫ぶと、三人同時に俺に抱きついてきた。

全く予想していなかったその行動に対処しきれず、俺は子ども達に引っ付かれたまま床に尻餅をついてしまった。

「お、おい。お前ら、一体何の真似だ」

俺は必死になり、ぎゅっとくっついてくる子どもを引き剥がそうとした。だが、小さい体に似合わず、なかなか掴んでいる手を放してくれない。

「おい、こらふざけるなら他の所でやれ。しまいに怒るぞ」

大声を上げると、三人のうちの一人がヒツと小さな声をあげて、俺から体を離した。

「イヤだ。お父さん怒っちゃだ」

子どもの目にうつすらと、涙が滲んでいることに気づいてしまった。

他の子どもも同じように俺から体を離し、じっと俺を見つめている。

俺は混乱する頭を静めようと、ため息をつき、ゆっくりと言った。「分かった……。とりあえず立って、ソファーに座ろう。それから、怒らないから事情を話してくれるか。どうして俺が『お父さん』なのかもな」

第二話 奇妙な依頼

俺は取りあえず子ども達をソファに並んで座らせた。

そして俺自身も、子ども達の前のソファに腰を下した。

だが話を聞くとしても、まず何から聞くべきか……。俺ははつきり言っただけ子どもが苦手だった。いや、苦手というより、どう接していいか分からないのだ。

「まあ、そうだな。取りあえず、そう名前。名前教えてくれるか」
何を聞こうか迷った挙句、俺はそう切り出した。一番左端に座った子どもが言った。

「あれ？ お母さんから電話無かったの？ お母さん、お父さんに電話するって言ってたのに」

「じゃあ、お前らはその、お母さんとやりに言われてここへ来たって言うのか」

俺の問いに、またもや左端の少年が首を縦に振った。

「うん。そうだよ……でも、ま、いつか。あのね、お父さん。僕の名前は羽鳥風^{はつぽうふう}って言うんだ。ふうって言うのはね。かぜって書くんだってお母さんが言ってたよ。でね、僕の隣にいるのが……」

「羽鳥爽^{はつぽうそう}。さわやかって意味の漢字だって。で、僕の隣が快^{かい}だよ。僕の名前とツイになってるんだってお母さんが言ってた」

子ども達の説明を聞きながら俺は考えていた。だが羽鳥という名前に覚えはない。そのお母さんというのは何者なのだろうか。そしてなぜ、この子どもたちは俺をお父さんと呼ぶのか……。

「どうしちゃったの？ お父さん。気分でも悪いの」

黙りこんだ俺を不信に思ったのか、一番右端に座った子ども、快が口を開いた。

「いやそれより、お前らは何で俺のことをお父さんなんて呼ぶんだ。俺はまだ二十六だぞ」

「えー、でもお母さんがそう言ったもん。僕の本当のお父さんはイ

チノセリヨウで。今の父さんは本当の父さんじゃないんだよって」

「うん、そうだよね」

風と爽が口々に言った。

「なあ、お前らのお母さんって一体誰なんだ」

俺は少しイライラしてこういった。誰なのか全く検討がつかない子どもにこんな無責任な話をしやがって。本当に信じてしまっているみたいじゃないか。コレも一種の嫌がらせなのか……。

「お母さんの名前はねえ、えーと何だっけ」

「えー、お母さんはお母さんでしょ」

爽と快が首を傾げた。おいおい、母親の名前くらい覚えとけよ。

「僕しってるよ。お母さんはね美紗子だよ。羽鳥美紗子っていうんだよ」

風はそう言うてにつこり笑った。俺はその笑顔に答えてやる事が出来なかった。

美紗子。その名前には覚えがあった。高校の時付き合っていた彼女の名前が美紗子だった。そう、今井美紗子。

だが、まさか、美紗子の子どもなのか？ この子達が？ 美紗子の子ども……。混乱してきた頭のまま、俺は子ども達を見つめた。そう言われてみれば似ていなくもない。目許などそっくりだ。大きな二重の瞳。そう、彼女もこんな目をしていた。

高校の卒業式と同時に姿をくらませた美紗子。さよならも言わずにいなくなった女。

もしかしたら美紗子の子どもかも知れない子ども達が、俺の前にいるのか……。

「なあお前ら、お母さんの写真持ってるか」

「うん。持ってるよ」

元気良く頷いた風は、背負っていた小さなリュックから、写真を一枚取り出した。俺は震えそうになる手を伸ばし、写真を受け取る。その写真は何処かの家の庭で撮られたものらしかった。並んだ風達の後ろに、その人物は写っていた。

美紗子だ。間違いない。美紗子だ。

記憶の中の美紗子より幾分細い面差しをしているが、その顔立ち、その笑顔はまさしく俺の知っている美紗子に他ならなかった。

俺はシヨックの余り、額に手をやると俯いた。そのまま写真を風に差し出す。受け取った感触に、俺は写真から手を離れた。信じられなかった。まさかという思いしかない。

美紗子は俺の能力を知って始めて理解し付き合ってくれた女性だった。美紗子と付き合っているとき、俺は幸せだった。美紗子もそうであると思い込んでいた。

美紗子が高校の卒業式の後、誰にも告げずに姿を消した時、俺はシヨックと共に絶望したのだ。

彼女もまた俺の能力が嫌になったのだらうと。

だから俺は彼女を解放しようと思った。あえて姿を消した彼女を、探し出そうとはしなかった。例えこのまま逢えなくとも……。

「はあ」

俺がため息をついた時だった。いきなり電話が鳴り出した。俺は気分を変えようと、立ち上がり受話器を取った。

「はい、一ノ瀬探偵事務所」

「ふふつ、やだ。声作っちゃっておかしい」

電話の向こうの相手にいきなり笑われ、俺は慙然とした。

「いたずらなら切りますよ」

「ああ、待って、ごめんなさい。相変わらず短気なのね。そういうところ」

俺ははっとした。

「もしかして、美紗子か」

「すごい、当たり。もしかしてもう着いてた？ 子ども達」

「ああ、着いてるよ……ってそんなことより、本当に美紗子なのか？ お前いつ結婚したんだよ」

俺の問いに、電話の向こうでしばし沈黙し、美紗子を名乗る女は言った。

『あなたの前からいなくなつて、三カ月後、かな。でももう離婚したわ。去年の九月に』

「そうか」

『そうなの。だから今はあなたと一緒にいた頃と同じ、今井に戻っているのよ』

七年ぶりの美紗子の声が記憶の中の美紗子の声と重なる。

不思議な感覚だった。もう一生会うことのないと思っていた相手と、七年ぶりに電話で話しているのだから。

「美紗子。お前どうして……」

どうしてあの日、君は俺の前から姿を消したんだ。聴きたかった言葉が、喉の奥に詰まってなかなか出てこない。俺の言いたいことを察したのか、美紗子は言った。

『昔のことはもういいじゃない。過去のことでしょ、お互いに』

美紗子のその言葉は、俺の胸に深く突き刺さった。予想以上に鋭い痛みが広がった。

「そうだな」

心とは裏腹に俺は精一杯平常心を保とうと、冷静な声を出した。

『ねえ、私あなたにお願いがあるのよ』

「お願い？ その前にこの状況を説明してくれよ。俺には何があつたがさっぱり分からない。お前の子ども達、俺のことお父さんなんて呼んでるんだぞ」

俺がそう強く言うと、電話の向こうで美紗子が笑い声を上げた。

『ふふふ、ヤダ。身に覚えがないとは言わせないわよ』

「……」

『あの子達は今年七歳になるの。私たち別れて七年目。計算は合うでしょう』

「嘘だろう」

『どうして嘘なんかつく必要があるのよ』

美紗子の声は落ち着いていて、冗談なのか本気なのか判断しかねる。またも混乱してきた頭を振って、俺は言った。

「美紗子。仮にあいつらが俺の子だしよう。だったら何故、お前は俺の前から姿を消したんだ」

『……』

美紗子は沈黙した。俺はその沈黙に耐えられず、美紗子の名を呼ぶ。

「美紗子」

少し間をおいて、美紗子がまた話し始めた。

『涼、過去のことでしょう。今更そんなこと言っただって始まらないわ。あの日私はあなたの前から姿を消して、あなたはそれを探そうとしなかった。違う？』

美紗子の問いに俺は答えられなかった。事実だったからだ。

『ねえ、時間が無いの。昔のことは置いといて、今の話をしましよ
う』

「今の？」

『そう現在の。ねえ、涼。私あなたに依頼したいのよ』

「依頼だって？」

思ってもいなかった美紗子の言葉に、俺はもう一度聞き返した。

『そう、依頼よ。あなた探偵でしょう。お金を払えば、依頼受けてくれるでしょう』

「まあ、内容にもよるけど」

俺は慎重にそう言った。

『よかった。じゃあ、決まりね』

美紗子が喜びの声を上げた。俺は慌てて、口を開こうとしたが、美紗子の方が早かった。

『依頼の内容は、私を探して欲しいの』

「は？」

俺は耳を疑った。こんな内容の依頼は初めてだ。猫や犬捜しはよくあるが、私を探してなんて初めて言われた。

『私の居場所を探して、会いに来て。それが私からあなたへの依頼よ』

「ちよつと待てよ美紗子。どういうことだ」

『ヒントはあげる。だから二週間以内に見つけて。それ以上は待てないから。あ、あと息子達をヨロシク。私は事情があつて、あの子達の面倒を見られないの。お願い。あなた父親なんだから、あの子達の面倒を見てね。その後のことはお互いが顔を合わせた時に』

「おい、待てよ美紗子、俺に子どもの面倒まで見ろつて言うのか。そんなこと出来るか。お前、厄介払いしようとしてるんじゃないだろうな。俺に子ども押し付けて」

ついそう怒鳴ると、美紗子の反論が返ってきた。

『失礼なこと言わないで。私があの子達手放して喜んでると思ふの。私にはあの子達しかないのよ。二度とそんなこと言わないで』

余りの剣幕に、俺はたじろいだ。確かに失言だったと俺は謝った。

「……悪かったよ、美紗子」

『いえ、……こちらこそ、ごめんなさい。少しイライラしていて。お願いしているのは私の方なのに。……とにかく息子達をお願い。今は春休みだから、学校はないの。まだ小さいし、迷惑かけるかもしれないけど、あまり怒らないでやってね』

「ああ、二週間だな」

『そう、二週間の我慢よ、涼。でもあなたが二週間以内に私を見つけてられなかったら、罰として、これから一生あなたに子どもの面倒を見てもらうからね』

「おい、美紗子」

『依頼料は前金で二十万払うわ。子どもに託してあるから、受け取つて。悪いけど、子ども達の生活費はとりあえずそこから出してもらえると助かるわ。じゃあ、ヨロシクね』

「おい、待てよ。美紗子、美紗子っ、おいっ。……畜生、切れてやる」

美紗子は言うだけ言うと、電話を切ってしまっていた。受話器から聞えるのは、回線の切れた音だけだ。俺は腹立ち紛れに受話器を電話にたたきつけた。

今更なんだと言った。俺の子どもだと？ 俺の……、俺と美紗子の子？ まさか。

まさかという思いしか浮かばない。確かに計算は合うのだ。けれど、では何故美紗子は俺の前から姿を消し、他の男と結婚したのだ。いくら考えても答えは出てこない。俺はイライラと、拳を机に叩き付けた。ふと視線を感じて振り向くと、子ども達が怯えた目を俺に向けていた。

「ああ、悪い。ほったらかしにしていたな」

子ども達はそろって首を横に振った。本当にそっくりだ。

「ねえ、お父さん」

「お父さん。今のお母さんだったの？」

そう言われて、俺は気づいた。美紗子はいいつらの母親だ。電話をかわってやった方が良かったのかもしれない。

「ううん。別にかわらなくてもいいよ」

快がそう言った。俺は驚いて快を見つめた。

「なあ快。俺、今声に出して言っただけだよ」

「あつ」

口元に手を当て、怯えたように見上げてくる快の前に立ち、目線を合わせる為にしゃがむ。

「お前どうして俺の考えていることが……」

「あつ、ねえねえお父さん。アレ何」

俺の声を遮る大声で叫んだのは風だ。風の指さした先には、今朝買った『はちみつあんこレモン風味』の缶があった。

「コレは今朝買ったんだが、飲みたいのか」

期待に満ちた目で風に見つめられ、俺はそう問いかけた。

「飲んでいいの？」

「不味いかもしれないぞ」

いや、十中八九不味いだろう。

「いい、飲みたい。な、爽、快」
「うん」

爽が元気良く頷いた。快もほっとしたように頷いている。

いいように話を変えられた気がしたが、俺はもう快に問いかける
気をなくし、立ち上がると缶を取りプルトップをあけた。それを風
に手渡す。渡したジューズを飲んだ三人のリアクションは、俺の想
像通りのものだった。

第三話 さて、どうしたものか

美紗子の言っていた依頼料前金二十万は、事務所から歩いて十分ほどの坂崎駅のコインロッカーに入っていた。コインロッカーの鍵は爽が持っていた。俺たちは金をとりあえず銀行に預け、昼食をとるために、喫茶コキアに入った。

子ども三人、それも同じ顔の子どもを連れて来た俺に、古木は驚きの顔を見せた。店内は昼のピーク時を過ぎたせいか、客はまばらだった。

「おまえ、いつの間に子持ちになったんだ」

いつもの指定席ではなく、四人掛けの席に着いた俺の前に、氷水の入ったコップを置いて、古木はそう言った。俺は肩を竦めた。今朝古木に似たような質問をしたことを思い出し、可笑しな気分になる。

「さあな。でも、美紗子の子だ」

「美紗子って、今井さんの？ 会ったのかーノ瀬」

古木は俺と美紗子の関係を知っている。心底驚いた顔で古木はそう言った。

「会ってない。電話で話ただけだ」

「ふーん、何か良く分からないけど、まあ、今井さん生きてたんだな」

「ああ」

俺は頷いた。古木は美紗子が生きていないと、思っていたらしい。それもそうだろう。七年も行方が分からなかったのだから。

古木は俺から子ども達に視線を移した。

「いらっしやい。君たちそっくりだね。三つ子かい」

「うん。そうだよ。おじさんはお父さんとお友達なの？」

「お、おじさん。そうか。おじさんだよなあ俺も」

小さく呟く声が聞こえた。シヨックだったらしい。だが俺も笑っ

てはいられない。俺だつて古木と同じ年だ。

「あれ、ちよつと待つて、今お父さんて言つた？」

古木はおじさんと言われたショックから立ち直つたのか、他の言葉に疑問を覚えたらしい。今度は爽が答えた。

「うん。そつだよ。お母さんがね、本当のお父さんは一ノ瀬涼いちのせりやうつて言つんだよつて教えてくれたの」

「どういうことだ？ 一ノ瀬」

俺はまた肩を竦めた。

「美紗子が言うには、こいつらは俺の子どもらしい」

「っはー。本当かよ」

「さあな」

古木は三人の子ども達の顔を、しばらく眺めた。

「そう言われてみれば、なんとなくお前に似てるような気もするよ。一ノ瀬」

「気がするだけだろ」

「そうかもな」

あつさりと俺の言葉に同意し、古木はオーダーを取ると店の奥へ引つ込んで行つた。

「ねえ、お父さん」

今まで黙っていた快が、遠慮がちに俺を見た。

「どうした」

出来るだけ優しい声をだそうと努力しながら聞いたが、快はもじもじと体を動かし、続きを口にしない。俺は少しイライラし始めた。これだから美紗子に短気だと言われるのだ。

「分かつた。快おしっこしたいんだろう」

大声でそう言つたのは風だ。その声に店内にいた客が、一斉に俺たちを見た。俺はスイマセンと目配せし、風を見る。

「こら、声が大きい」

「だって、そつだもん。なあ、そつだろ快」

生意気に言つた風に、快は小さく頷いた。

「あ、ボクも行きたい。トイレどこ？ お父さん」

爽に聞かれ、俺は店の奥を指差した。

「あそこだよ」

「じゃあ、ボクたちいつてきて良い？」

「ああ。ちよつと待て、お前ら一人で出来るのか」

「当たり前じゃん。僕たちもう六歳だよ」

風は少し膨れっ面をして、さつさと席を立つと、トイレへと歩き出した。それに爽と快が続く。まだ会って数時間しかたっていないが、なんとなく子ども達それぞれの性格が分かってきた。

風は明るく良く喋るが、少し生意気で我がまなところがあるようだ。そして、爽。こちらでも明るく風に次いで良く喋るがマイペースなところがある。最後の快は一転して余り喋らず、いつも何かに怯えているような感じを受ける。

同じ顔をしているのに違う性格の三人を見ているのは、少し面白いと感じはじめていた。そんなことを思っていたとき、古木がまた戻ってきた。

「どうした？」

俺が聞くと、古木は何故か俺の前の席に腰を下した。

「いいのか？ 仕事中に」

俺が問うと、古木は真面目な顔で頷いた。

「ちよつと、抜けてきた。聞きたい事があつてさ」

「何だよ」

俺は古木の真面目な顔に気おされて、そう言った。

「今井さん、今頃何の為に前にお前に電話かけてきたんだよ。さっき聞きたかったけど、子ども達が居たしさ。今のうちに簡潔に説明しろ」

なんで、命令口調なんだよと思いつつ、俺は古木に美紗子との電話内容を簡単に説明する。

「ふーん。私を探してね……。良く解らないな。今井さんの考えは」
「だろう？ でも、まあ、前金で二十万ももらったし、とりあえずあいつらの面倒みながら探すつもりだよ」

「うん。それしかないだろうな。それに今井さんに会えば、お前の、うじうじした未練も解消されるかもしれないし。なんなら、より戻しちゃえば？ 子どももいることだし。今井さんフリーなんだろう」

古木は笑い混じりにそう言つと、席を立つて、カウンターの方へ戻つて行つた。まったく好き勝手言いやがって。

古木が席を立つたすぐ後、子どもたちが、三人そろつて戻つて来た。それを見計らつたかのように、古木の新妻がスパゲティを四つ運んでくる。

「みんな、いっぱい食べてね」

「はい」

アキさんの声に元気良く返事した爽と風は、勢い良くスパゲティを食べ始める。それを横目で見てから快もゆつくりとスパゲティの麺を口に運んだ。

「可愛いなあ」

子ども達が食べている姿を見て、アキさんがお腹をさすりながらそう呟く。生まれてくる子どもとダブラせているのかも知れない。

それにしても、コレが可愛いのか？ 俺にしてみれば、汚いという思いの方が強かつた。子ども達の口の周りはケチャップにまみれていたし、テーブルには食べこぼした後が無数にある。もつと綺麗に食べられないものだろうか。それとも子どもはこんなものなのか。良く見ると、子ども達のフォークの握り方がおかしいことに気づいた。彼らはダンベルでも持っているかのようにフォークを握っている。フォークを麺の中にさし、救い上げるように持ち上げるのだ。麺はまきつけていない為、当たり前のように滑り落ちていく。

「お前ら、フォークの持ち方おかしいぞ」

俺は子ども達に、フォークの持ち方を教えてやった。子ども達は素直に俺の言うことに従つたが、フォークを持つ手はぎこちない。必死になつて食べようとする姿が可愛い。

思つた以上に長い時間をかけて、昼食を終えると、俺たちは事務所兼自宅へと歸つた。

留守電には予想に反して一件の用件も入っていなかった。俺は少しがっかりした。美紗子から電話が来ているのではと、少し期待していたのだ。

俺は空き部屋を子ども達の部屋にすることにし、子ども達にその部屋の掃除を任せた。その間に子ども達の持っていたリュックの身を調べることにする。美紗子の言っていたヒントとやらが入っているかもしれないと思ったのだ。

もちろん子ども達には中を見ることの子承を得ている。三つの小さなリュックの中には、そろいの歯ブラシと、そろいの下着と、そろいのパジャマが入っており、他は風のリュックの中に財布が入っていただけだった。美紗子の言っていたヒントとなるようなものは何処にもなかった。

さて、これからどうしたものか。とりあえず、美紗子の元夫とやらに会いに行ってみようか。最近の美紗子のことを知っているのはこの男だ。この男が美紗子の居場所を知っているとは考えにくいが、会う価値はあるように思えた。

そしてもう一つ。

子ども達の荷物も取りに行かなければならない。

子ども達に聞いたところによると、昨日はその元夫の家に泊まったのだそうだ。衣料品などは重かったためその元夫の家に置いてあるらしい。美紗子が子ども達にそうするように言ったのだそうだ。それを取りに行く必要がある。そうじゃないと、子ども達は毎日同じ服を着ることになる。家には子供用の服なんて一つもないのだから。

「お父さん、お片づけ終わったよ」

部屋からこちらに顔を覗かせたのは多分、風だ。

「ああ、わかった見に行くよ」

俺はそう答えて、子供たちの部屋へ向かった。

第四話 美紗子の元夫と子ども達

翌日は少し雲が広がる天気だった。

雨雲でないことを祈りつつ、俺は昼過ぎ、子供たちと連れ立って事務所を出た。

幸いにも美紗子の元夫の家は調べるまでもなく分かった。子供たちが住所を覚えていたからだ。

最寄の駅であり、俺は子供たちに連れられるように、見慣れぬ街を歩いた。

駅から二十分近く経っただろうか。子供たちは一つの家の前で足を止めた。木の壁の古い家。コンクリートの塀に囲まれた貧相な家だった。

小さな門の横には羽鳥と書かれた表札がでていた。インターホンを押すと、すぐに男性の声で応答があった。来る事は事前に、電話で連絡を入れている。

俺が自分の名前と用件を告げると、しばらくして玄関のドアが開いた。そこから出てきたのは頭の禿げあがった線の細い男だった。男は俺に嫌な視線を向けると、こう言った。

「あんたが、そいつらの本当の父親か？」

「さあ、私は美紗子さんに依頼された探偵ですから」

「ふん、ご苦労なことだな。そんな化け物の面倒見るって言うんだから」

はき捨てるように男はそう言った。その目は俺の後ろに立っている子供たちに向けられていた。俺は眉を寄せた。化け物とはどういう意味だろうか。

「化け物？ それはこの子達のことですか」

俺はさっきからいやに大人しい三人の子どもたちを見た。子どもたちは悲しそうに目を伏せて、俺の後ろに隠れるようにして立っている。特に快は俺のズボンを掴んで少し震えていた。

「ああ、アンタもすぐに分るよ。こいつらはまともじゃねえ。こんなガキはさつさとくたばった方が世の中の為だよ」

その言葉に俺は怒りを覚えた。目の前にいる子どもにそんなことを平気で言えるような人間が、この子達の父親だったのだ。

美紗子は男を見る目が無いようだ。もちろん俺のことも含めて。

「子供たちのいる前で、そう言う言い方は無いんじゃないですか」

つい、俺はそう言っていた。男は憎々しげに顔をゆがめて俺を見た。だが、言い返すことはせず、俺に大きなボストンバックを一つ投げて寄越した。

「そこに、こいつらの服が入っている。こいつらの荷物はそれだけだ」

「そうですか。どうも。ところで羽鳥さん」

「ああ？ 何だ。まだ何かあるのか」

「美紗子さんが今現在何処にいるのか、ご存知ありませんか」

「はあ？ 俺が知るわけないだろう。離婚してから居場所も知らねえ。それが三日前、こいつら連れて現れたかと思ったら、俺にこいつら押し付けてさつさとどっか行っちゃった」

「そうですか」

俺は少しがっかりした。まあ、始めからこの男には余り期待はしていなかったが。黙った俺に、男はなおも話し続ける。

「全くアイツも恩知らずな女だよ。お腹に子供のいるアイツを拾ってやった恩も忘れて、急に離婚だなんて言い出しやがって……」

「そもそもあなたはいつ何処で、彼女と知り合ったんですか」

それは最初からあった疑問だった。美紗子はいつからこの男と付き合っていたのだろうか。俺と付き合っていた時、美紗子はこの男とも付き合っていたのか……。

俺の問いに男は一瞬虚をつかれた顔をし、そして俺に言った。

「あいつに初めて会ったのは七年前。場所は飲み屋だよ。そのホステスだったんだ。たしかルビーって店だ。この近くだよ」

「ホステス……」

意外な言葉に、俺はただそう繰り返していた。

「ああ、そうだ。アイツ見てくれは良いからな。腹に子供がいるって言う話しを聞いてな。俺は同情してやったんだ。それが、生まれてみりゃ、子供は化けもの。俺は本当についてねえよ。俺はあの女に騙されたんだ」

男がそういう終えた時だった。男の頭上。玄関の上についていた電球が、まるで銃にでも撃たれた様に、粉々に砕け散った。だが何かが当たったわけでは無い。それは勝手に砕けたのだ。

男は驚いて禿げた頭を腕で覆っている。俺も手を顔の前にかざして破片を避けた。俺は腕を下すと、後ろを振り返った。風に視線を合わせる。風はバツが悪そうに顔をそむけた。

「おい風、今おまえが……」

俺の声に被せるように、男が怒鳴った。

「おい、今のは誰がやった。全く何度家のもの壊せば気が済むんだ。もう二度と俺の前に顔を見せるな。分かったなガキども」

そう言っただけ男は憤然と俺たちを睨み、さっさとドアを開けて家に入ってしまった。

俺はしばらく呆気にとられていたが、いつまでも玄関の前に立つて立っている訳にはいかないと気づいた。後ろの子ども達を振り返る。「さて、そろそろ移動しようか」

俺はさっき渡されたボストンバックの紐を肩に掛けると、子ども達の背を押して門を出た。

そして俺は歩きながら風に声をかける。

「すごいな風。さっきの電球、お前がやったんだろ」

「……僕じゃないよ」

風は俺に視線を合わせないように、横を見て言った。明らかに動揺している。嘘がバレバレだった。

「隠さなくたっていいさ。ちよつといい気味だったしな。腹が立ったんだろ。化け物扱いされて」

俺がそう言うと、風は驚いたように立ち止まって俺を見上げた。

そしてそんな風を、他の子供たちが見つめている。

「違うよ。お母さんの悪口、言ってたからだ」

風はそう言ってまたそっぽを向く。

「やっぱりお前がやったんだな」

俺が言つと、風は顔を顰めて俺を見上げた。

「お前がやったんだろ？」

俺はしゃがんで風に視線を合わせる。風は観念したのか、はつきりと頷いた。

「うん。僕がやった。ごめんなさい」

「どうして謝る？ 悪い事したって自覚があるのか？」

俺が問うと、風は固い表情でこう言つた。

「だって、危ないんでしょう？ お母さんが言ってたもん。その力
は人前で使っちゃいけないよって。危ないからって。でも、僕、父
さん嫌いだから……」

「うん。俺も、あの人あんまり好きじゃないな。だけどな、風。や
っぱりああいうのは良くないよ。さっき怪我は無かったけど、もし
怪我したらどうする？ 破片が目に入ったら目が見えなくなること
もあるんだぞ」

「目が見えなくなるの？」

「そう、そういう事だつてある。もつと酷いことにだってなるかも
しれない。……風は、指を切ったことあるか？」

「あるよ。幼稚園で、はさみで指切った」

そう言つて風は小さな手を俺に見せた。だがそこに傷はない。前
の話なのだろう。俺はその風の小さな手を、両手で包み込む様にし
て言つた。

「じゃあ、分るだろう。怪我したら痛いんだ。だから、他の人に怪
我をさせるようなことはしちゃいけないんだ。自分は痛くなくても、
その人は痛いんだからな」

「……はい」

風は素直に頷いた。いつも元気で明るい彼は、随分と落ち込んで

しまったようだ。

俺は風の手を離すと、その手を風の頭の上に置いて少し荒っぽくなでてやった。すると風が俺を見上げて恥ずかしそうに笑った。俺も笑顔を返す。

するとそれを見ていたほかの二人が、俺に言った。

「いいなー。お父さん。僕もやってほしい」

「僕も」

俺は二人のリクエストに答え、両手を使って二人同時に頭をなでてやる。二人はくすぐったそうに笑っていた。

俺はそんな子ども達を見つめて思った。

この可愛い子ども達は美紗子の言うとおり、俺の子どもかもしれない。そう、思っていた。

第五話 バーへ行く

俺たちは羽鳥の家を出て、教えてもらったバーに向った。

そこは駅近くの裏通りにあった。こじんまりとしたバーで、ドアには準備中の札がかかっている。

子どもをこんな所まで連れてくるのは気が引けたが、子ども達だけで帰すわけにもいかず、一緒に連れて来ていた。オレはドアノブに手をかけて力を入れる。ドアは難なく開いた。

「スミマセン。誰かいませんか」

半分身体を室内に入れ、声を掛けると、奥から返事が聞えた。

「はい、すみませんねえ。まだ準備中なんですよ」

店の奥から出てきたのは濃い化粧をした女性だった。華やかな美人顔だが、そこそこの年をとっていた。

「いや、客じゃないんです」

「客じゃない？　じゃあ、何さ」

カウンターの奥にいた女性はカウンターから出ると、俺の前まで来る。

「あら、可愛い子達がいるじゃないの。もしかしてミサちゃんの子かしら」

「僕たちの事知ってるの？　おばさん」

「おばっ……」

女性は絶句した。子ども達から見れば、いや、俺から見てもおばさんだったが、女性はまだそう思っていなかったようだ。

「美紗子がこちらに勤めていたというのは、本当だったんですね」話を变えようとそう言うと、女性は俺に顔を向けた。そしてなぜか見つめられる。居心地悪くなった頃に、女性がようやく声を出した。

「あなた、もしかして一ノ瀬涼さん？」

「え？　ええ。そうです。でもなぜ私の名前を？」

俺が問うと、女性は華やかな笑みを見せた。

「この間ミサちゃんが来てね、一ノ瀬涼って言う人が尋ねてきたら渡してもらいたい物があるって、ここに置いていった物があるのよ」俺は驚いた。まさか美紗子がつい最近ここに来ているとは思わなかった。

「中入って。色々聞きたいことがあるって顔してるわよ。子ども達もいらつしやい、ジュース出してあげるから」

そう言って女性は俺たちを店の中に招き入れた。子ども達をカウンター席に並んで座らせ、その前にオレンジジュースを出した後、女性は店の奥に入った。俺は離れた席に一人座り、出されたコーヒーの前で待っていた。

程なくして戻ってきた女性は、俺に白い封筒を差し出した。そして俺の前の席に座る。

「コレが、ミサちゃんから預かったものよ」

「ありがとうございます」

「ふふつ。あなたがミサちゃんのいい人か。ミサちゃん面食いだっただのねえ」

「え？」

「あ、名前言ってなかったわね。私澤田^{さわだ}。澤田広美^{さわだひろみ}ミサちゃんの言っただ通り良い男で嬉しいわ」

そう言って澤田広美は笑った。俺はそんな澤田に愛想笑いで返して、名刺を差し出した。

「へえ、お若いのに、探偵さんだったの。それが何で子供たちと一緒に？」

「どうやら澤田は、俺が美紗子のいい人だというのは勘違いだと思っただけ。俺はコレまでのことを簡単に話した。」

「へえ、自分を探してねえ。面白いこと考えたわね。ミサちゃん」

「あの、美紗子はどうしてあなたの所で働くことになったんですか？」

俺の問いに、澤田はふと遠い目をした。

「そうねえ、あれは今から七年前の春だったわ。うち、ちょうど近くに出来た店に若い子取られちゃって、ホステスが不足してた頃だったのよ。店のドアにホステス募集の張り紙してたの。それを見て店に入ってきたのが、ミサちゃんだった。若くて美人だったけど、ちよつと若すぎるかなって思ってたね、最初は断つただけど、ミサちゃんしつこくてね。余りにしつこいから、どうしてそんなにホステスになりたいのかって理由を聞いたのよ。そしたら……」

「そしたら？」

「……タバコ、吸っていいかしら」

「え？ ああ、どうぞ」

「ありがとう」

澤田はそう言うと、タバコを取り出し、机の上にあったマッチを擦って火をつけた。そのマッチの火は息を吹きかけて消し、机の上にあった灰皿に投げ入れる。澤田はタバコを吸い、吐き出すと、遠い目をして口を開いた。

「……ミサちゃん、あの時本当に真剣な顔して、こう言ったのよ。

私のお腹には子供がいます。私は一人でこの子を育てていかなきゃならないんですって」

俺はタバコをくゆらす澤田を見ながら考えていた。美紗子のことを。真剣に澤田に頼み込む美紗子の姿が頭に浮かぶ。美紗子は真面目で、真の強い女性だった。

「相手の男はどうしたの？ 子供がいるのは知っているのかって聞いても全く答えない。結局根負けして、ミサちゃん雇って……。結構ミサちゃん評判良くてね。そこであの羽鳥とか言う男に言い寄られて、結局結婚しちゃたのよ。私は止めたんだけどねえ、あの男にアンタは勿体ないよって」

そう言ってまたタバコを吸った。煙を上に向けて吐き出してから、話を続ける。

「ミサちゃんが子供を産んで、一、二年は付き合いがあったんだけど、それっきり何となく連絡取ることも無くなってたの、そしたら

この間、その封筒を届けにミサちゃんが来たのよ」

澤田は机に置かれた、白い封筒を見た。

「いつ頃ですか？」

俺が聞くと澤田は少し考え込んでから口を開いた。

「ああ確か、そうね。ちょうど一週間前だったわ。最初はミサちゃんって分らないくらい痩せてて、ビックリしたのよ」

「痩せてた？　じゃあ、この写真の時より、だいぶ痩せてるって事ですか」

そう言つて俺は、子ども達と一緒に写っている美紗子の写真を見せる。

澤田はそれを手にとってすぐに頷いた。

「そう、全然違つたわ。もともと痩せているのに、もう骨と皮みたくに痩せちゃつて、どうか悪くしてるのかって思わず聞いたほどよ」

「美紗子は何て？」

「ちよつと身体を壊しているだけだつて、たいしたことないつて笑つてたわ」

「そうですか……」

「そう。ねえ、ところでその封筒開けないの？　中身が気になるんだけど」

そう言つて澤田は、俺の前に置いてある封筒に視線を送ってくる。俺は一瞬躊躇したが、封筒に手を伸ばした。封を切り、中身を逆さにして出す。手の中に落ちてきたのは、一枚の紙と、鍵だった。どこかの……たぶん駅のコインロッカーの鍵だろう。

俺は鍵を机の上に置き、紙に目を移した。裏も表も白い紙。

「あら。その紙、何も書いてないじゃない。ミサちゃん間違えたのかしら」

澤田がそう言つた時である。

ガシャンという音がして、子ども達の一人が叫んだ。

「あー、快がコップ落としたー」

俺がその声に振り向くと、快の座るイスの下に、割れたコップの

破片が散乱しているのが目に入った。快が泣きそうな顔をして、俺を見る。

俺はこういう時、子どもになんて言っているのか分からない。叱るべきなのか？ 俺が戸惑っている間に、タバコを灰皿に押し付け、澤田が立ち上がった。

「あら、危ないから動かないのよ」

イスから降りようとしていた快到釘を刺し、澤田が店の奥へと消えた。箒でも取りに行ったのだろう。俺も立ち上がり、快の元まで歩く。

「お父さん、ごめんなさい」

俺に怒られると思っているのだろう。快の目に涙が溜まっている。それを見ていると、なんだがかわいそうになってくる。他の二人も俺の出方を見るように、じっと俺に視線を送ってくる。俺は軽く溜息をつく、椅子に座った快到の視線に合わせて少し腰を屈め、こう言った。

「快、怪我しなかったか？」

俺が聞くと、ビックリしたような目をして、快は頷いた。

「うん。ケガしてないよ」

「そうか。ならいい」

そう言っただけは快到に笑ってやる。

快は不思議そうな顔になった。俺はそのまましゃがみ込み、足元に落ちているコップの破片を拾い始めた。ジュースは全て飲み終わった後だったらしく、床にはコップの破片と溶けかけた氷が散乱している。

「快、何で落としちゃったんだ？」

そう聞いたが快は声を出さない。しばらく待っていると、快ではない声が頭上から降ってきた。澤田の声だった。

「あら、危ないわよ。箒持ってきたから。これで集めるわ」

澤田に場所をあげ、俺は手に拾った破片を塵取りに入れる。

「すいません。澤田さん」

「いいのいいの。子供だもの。酔っ払いもよくコップ落として割るのよ。こういうのは日常茶飯事って訳。ねえボク、怪我しなかった？」

澤田が快に聞く。快はこっくりと頷いた。

「うん、ごめんなさい」

「あら、いいって言ったでしょ。怪我なくてよかったわね」

澤田は快に笑いかける。快はしゅんとして俯いている。澤田は日常茶飯事と言っただけあり、てきぱきと片付けを終えた。

第六話 暗号

俺は澤田に礼を言い、封筒に入っていた鍵と、何も書かれていない紙を持って店を出た。子ども達を引き連れて、事務所まで戻る。

ちょうど時間が三時を過ぎたので、俺は子ども達に喫茶コキアでアイスでも食って来いと金を渡し、ていよく事務所から追い出した。一人になりたかったのだ。

俺は澤田から預かった封筒を取り出した。鍵ではなく、俺が見たかったのは何も書かれていない紙の方だ。

俺はコレを見た時すぐに思い出した。俺と美紗子との間で、一期流行^{はや}った遊びの一つを。

美紗子が白い紙に思いを込める。例えば一文字を頭に思い浮かべ、紙に念じる。

それを俺に渡して、俺がその紙にうつった美紗子の思いを読み取るのだ。

美紗子は良く『愛してる』とか『大好き』だとかを紙に写して、俺に読ませては喜んでいた。普段絶対に恥ずかしくて口にしない俺から、その言葉を引き出したかったらしい。

今考えると、なんともバカッフルな遊びだと思う。いや、恥ずかしい。

何はともあれ、俺はその白い紙を手にとった。

目を閉じて、紙に意識を集中させる。

暗闇の中に、何かが白く浮かび上がってくる。

それに俺は意識を向ける。だんだんとそれが文字の形に見えてきた。

『野里駅』

野里駅？ 俺は目を開けた。

デスクの上に置きっぱなしの鍵を取る。これが野里駅のコインロッカーの鍵なのか。俺は立ち上がった。野里駅はここからそう遠く

ない。坂崎駅の次の駅だ。

俺は逡巡した後、一度コキアに寄って子ども達を古木に頼み、事務所を後にした。野里駅に向うつもりだった。さつさとこのふざけた依頼を終わらせてやる。そして、美紗子に問い詰めるのだ。なぜこんな馬鹿げたゲームを思いついたのか。

なぜ、今頃になって俺に子ども達を会わせたのか。

野里駅に着き、コインロッカーが一箇所にしかないのを確かめ、俺はその場所に向った。鍵についている番号を確認し、延滞料を入れてコインロッカーの扉を開いた。中には薄っぺらい封筒が一枚入っているだけだった。澤田の所に預けていた物と同じ封筒のようだ。俺はそれを手に取ると、その場で開けてみた。そして思わず声を上げた。

「何だコレ」

中にあつた紙には、先ほどの紙とは違い文字が書かれていた。だがその文章は、はつきりいつて意味不明だ。訳が分からない。俺はもう一度コインロッカーの中に何も入っていないかを確認し、その場所を後にした。

事務所に上がる前に、俺は喫茶コキアに入った。時刻は午後七時を過ぎようとしていて、店内は閑散としている。もうすぐ閉店だ。俺は子ども達の姿を探したが、子ども達は店内にいないようだ。

「おい、古木。子ども達は」

俺はカウンターに近づき、古木に声をかける。古木は笑顔で、指を一本上に向ける。

「上に、アキちゃんというよ」

「ああ、悪いな」

「別に。アキちゃん子ども好きだしね。午後からはバイトも来たから」

そう言つて人のいい笑みを浮かべる古木にもう一度礼を言い、事務所へ上がる。階段を上がっていくと、子どものはしゃぐ声が聞こえてきた。どうやら楽しくやっているらしい。

俺は事務所ではなく、自宅スペースに直接通じるドアを開けた。

「あ、お帰りなさい」

風が俺に気づいていち早く声をかけてきた。

三人は床に座って何かを書いていたらしいが、俺が入ってきたのを見て、こちらに駆けてくる。子ども達は歓声を上げて俺に三人して抱きついてきた。危うくバランスを崩しかけたが、倒れることは免れる。

部屋の奥の台所からアキさんが姿を現した。

「あ、お帰りなさい。一ノ瀬さん」

にこりと微笑んで見せてくれるアキさんに、俺は頭を下げる。

「ただいま。すみませんアキさん、ご迷惑おかけして」

「いえ、迷惑だなんて。私子ども好きだし、良い予行演習にもなるし」

そう言つて、お腹をさするアキさんはすっかり母親の顔をしている。古木め、良い奥さん見つけたな。そう思い、少し羨ましくなる。「ねえ、お父さん。僕たちね。お絵かきしてたんだよ」

爽が俺の袖を引っ張って言った。とりあえず、俺は爽に向き直った。

「へえ、何描いたんだ」

爽は嬉しそうに笑つて、俺の手を取り引っ張っていく。

「あのね、あのね。みんなでかいたんだよ」

「みんな。一緒に出すよ」

そう言つて、風がお絵描き帳を手にした。爽も快も自分のお絵描き帳を床から拾い上げ、俺の前でいつせいに開く。

「お父さんの絵」

俺の前にかかげられた絵は、紙にいびつな線とマルで描かれた人間らしき物だった。

コレが俺？ 俺って子どもにはこんな風に見えてるわけか。快のものはまだ人間に見えるが、風のははつきり言つて顔の下から角が生えているようにしか見えない。

噴出したいのを堪えて、子ども達を見ると、子ども達はわくわくとした表情で俺を見ている。俺はそんなほえましい光景に、自然と笑みになるのを感じる。

「へー、すごいな。みんな上手いな。嬉しいよ」

笑いをかみ殺しながらなので、説得力は無いと思いつつも、俺はそう言った。子ども達は溢れんばかりの笑顔で顔を見合わせ、やったーと喜んでいる。

「いやーん、可愛い。私も三つ子ほしいなあ。やっぱり子どもは多くないと」

おおはしやぎの子ども達を、うつとりとアキさんは見つめている。俺は苦笑した。古木、頑張れよと心の中で応援する。

「あ、そうそう。一ノ瀬さん、夕飯作ってみたんですけど、今食べます？ もし良かったらリヨウ君も一緒に皆で食べませんか。八時過ぎるかも知れないんですけど」

リヨウ君とは古木のことだろう。一瞬混乱する。俺もリヨウだからだ。お互い読みが同じだとややこしい。

「俺は構わないけど。……おい、お前らお腹すいたか」

俺の問いに、子ども達は同じように首を横に振った。

「こーんな大きなパへ食べたから、まだすいてない」

身体全体を使って大げさに表現した風に、快が律儀につっこんだ。

「そんな大きくないよ。こーんなだったよ」

胸の前でカップの大きさを表す。

「美味しかったか」

俺が聞くと、爽が頬に両手を当て、うつとりとこう言った。

「すっごくおいしかったー。僕パへ大好き」

「そうかそうか。良かったな。ところで、パへじゃなくて、パフェだろ」

俺は一応そうつつこんでおいた。

「えー。パへだよ。アキおねえちゃん」

「うーん。パフェだなあ」

「えー。パヘでしょ」

「違う。パ、フェ」

俺たちはしばらくパフェの発音レッスンをこなったが、子ども達は結局言えずに終わった。

俺は子ども達をアキさんに任せ、風呂掃除をすることにした。昨日は子ども達を風呂に入れていない。さすがに今日は入れないと不味いだろう。ちなみに昨日、俺はシャワーで済ませている。

俺が風呂場の掃除をしている間に、連絡しておいた古木が来たようだ。風呂場の掃除を終えた後、食事が始まった。

食卓は四人掛けの為、俺と古木はテレビのある居間のソファーに座り食事をしていた。

「おい、一ノ瀬。今井さん、見つけりそうか？」

古木の問いに、俺は苦笑いを返す。

肉じゃがを箸でつつきながら、言った。

「あー、実は行き詰ってる」

古木は細い目を見開いた。

「へえ、でもさっきはヒントを取りに行くって言ってただろ」

「そのヒントが俺にはさっぱり分からない」

「なぜ？」

「多分暗号か何かだと思っただけだな。俺はああいうのは苦手なんだ。昔から」

「ははは、今井さん推理小説好きだったな。そういえば」

「そう。それで俺が暗号苦手なのも知ってた」

「なあ、良かったら後で見せてくれないか？ その暗号」

俺は一瞬迷ったが、頷いた。自分では絶対に分らないような気がしたからだ。美紗子には人に見せるなどとは言われていない。契約違反では無いはずだ。それにコイツも推理小説が好きだった。

思いのほか美味かった夕飯の皿を片付ける。

その後、アニメを見たいと言う子ども達と場所を変わって、古木に野里駅で見つけた紙を見せた。古木は紙を見て唸った。

そこにはこうか書かれていた。

『私はさとうが嫌いです。』

かさというのと

じーさとんずと

のさすそのうなとかに

ほつとさつちき

すさつでと

ぴつとたりつけ

たものさがみとちし

るべとさつにさなる
『

コレだけだった。俺にはまだ日本語になっている最初の文以外意味が分からないのだ。

「おい、一ノ瀬。お前本当に探偵か？」

古木は唸った後、俺にそう聞いてきた。俺はムツと眉を寄せ、古木を見る。

「何だよ」

「こんな簡単なのが分からない探偵ってどうよ。小学生でも分るんじゃないか」

「えー？」

俺は古木から紙を引たくり、もう一度文字を追う。だがやはり、分からないものは分からない。しばらく紙とにらめっこしていた俺の背後から、いきなり声がかかった。

「何見てるんですか？ 一ノ瀬さん」

「あ、アキちゃん。それ、暗号なんだけど、どう？ 分かる」

いつまでも答えの分からない俺に呆れたのか、古木は皿洗いを終えた新妻にそう聞いた。

俺は顔を顰めて見せたが、どうせ分かりはしないだろうと、アキさんに紙を渡す。

「えーと、私はさとうが嫌いです？ ああ、さとうを抜けばいいのね」

だが俺の予想とは裏腹に、アキさんはあっさりと暗号を解いてしまった。

「さ、と、うを抜けばいいんだから……か、い、の、じー、んず、のすそ、のな、かに、ほっちき、すで、ぴっ、たりつけ、たものが、みちし、るべ、になる」

区切り区切り読まれたので、分りにくいけど、つまりこの暗号の答えは。

『快のジーンズの裾の中にホッチキスでぴったりつけた物が道しるべになる』だ。

「変な文章だな」

俺は答えを聞いて、そんな感想を持った。

「なんでわざわざぴったりとか、道しるべとかいう言い回しをして

るんだろっ」

そう俺が言うと、古木とアキさんは顔を見合わせて首を捻った。

「それより、調べてみないんですか？ 快くんのジーンズ」

「快のジーンズって、今はいているやつか」

古木に言われて、俺は居間を見る。快はテレビに見入っていた。

「多分そうだろうな。あいつら今日取ってくるまであの服しかなかったし」

「じゃあ、私が裾ほどいてみましょうか」

「あ、じゃあそうしようよーノ瀬。俺中身気になるしさ」

「じゃあ、あいつら風呂にいれるか。さっき風呂沸いたしな」

「あ、それいいですね。服も脱ぐし一石二鳥だわ」

俺は立ち上がり、子ども達に声を掛けた。ちょうどいいタイミングで、子ども達が見ていたアニメが終わったようだ。

「おい、風呂入るぞ」

「えー」

子ども達は振り向いて、抗議の声を上げる。

「何だよ。風呂嫌いか？」

「まだ入りたくない」

と、風が言う。

「僕は入らない」

いつも大人しい快が膝を抱えて俺に背を向ける。

「でも、昨日も入ってないだろう、お前ら。汚いから今日は入ろうな」

「……じゃ、僕入る」

そう言って立ち上がったのは爽だった。風は渋々と言った感じで立ち上がる。だが快は立ち上がるうとしなかった。俺は強硬手段に出た。快を無理やり抱き上げたのだ。一番風呂に入って欲しいのは快なのだ。

「快、入るぞ」

「いーやーだー」

快は暴れたが、俺は抱き上げたまま脱衣所に連れて行った。先に脱衣所に来ていた、風と爽はまだ服を脱いでいない。

「おい、ほら、早く服脱げよ」

俺が快を下して言うのと、子供たちは顔を見合わせる。

「お父さん。僕たちだけで入るから、お父さんは出てってよ」

風がそう言う。俺は首を傾げたくなつた。こんな小さな子どもが、裸を見られるのを恥ずかしいと思うのか？ それとも何かを隠しているのだろうか。

「お前ら、何か隠してるだろう」

「か、隠してないよ」

風が俺から目を逸らした。俺はそれを見て確信した。風は今日も嘘を付いたとき俺から目を逸らした。どうやら風の嘘を付くときの癖らしい。

俺は、近くにいた快の手を取った。

その瞬間、俺は見た。いや、見てしまった。

俺が見たのは映像だ。多分、今快が強く思い描いていたものだろう。俺は有無を言わず、快のシャツを脱がした。快の上半身が露になり、俺は絶句した。今見えた映像そのままの姿に息を飲む。

酷い。

酷すぎる。

快の小さな身体には無数の青痣があつた。大きいから小さいのまで。

俺は泣きそうに顔を歪ませた快の細い腕を掴んだ。

「どうしたんだコレ」

俺の問いに答えたのは快ではなく風だった。

「父さんが快を殴ったり蹴ったりしたの」

「父さん？ アイツか」

今日あつたあの羽鳥とかいう、細身の男を思い出す。俺の中に沸々と怒りが込み上げてきた。アイツは言葉だけじゃなく、子どもに暴力までふるっていたのか。

「お父さん。僕が悪いんだよ。僕が悪い子だから、父さんは僕を殴るの。僕が父さんの心の中読んじゃうから、父さんは僕を蹴るんだよ。でも、僕ダメなんだ。勝手に聞えてきちゃうの。聞きたくないのに、僕のこと嫌いだって、父さんが思ってるのが分るの……」

泣き顔になってる快を、俺はたまらなくなつて抱きしめた。こんなに小さいのに、身体にも心にも大きな傷をおつていたのか。

「ごめんな。快」

「……どうしてお父さんが謝るの」

快が俺の腕の中で身じろぎする。俺は快を離して、風と爽に向き直った。

「お前らも殴られたりしたのか？」

二人は同時に頷いた。

「でも、快よりは少ないよ。僕はやり返すもん」

そう言つたのは風だ。今日電球を割つたようなことをしてきたのだろう。

「爽は？」

「僕も快より少ない。父さんが殴りに来る前に気づくことがあるから、その時逃げる」

「見せてみな」

俺が言つと、二人は素直に服を脱ぐ。俺は溜息を吐いた。少ないといつても十分多い。それも多分最近出来た傷だ。美紗子と一緒にいて、羽鳥の暴行を止めなかったのだろうか。

「お母さんは居なかったもん。お仕事で」

快が俺の思つたことを読んだのか、そう呟いた。

「そうか、分かった。とりあえず風呂入ろうか。脱いだ服は俺に渡して」

そう言つて、子供たちを風呂場に追い立てた。湯船には勝手に入るなど言いおいて、俺は快のジーンズを持って脱衣所を出る。

「古木、持ってきたぞジーンズ」

「あ、下から裁縫道具取ってきたんで、貸してください」

俺はアキさんにジーンズを渡すと、その足で、救急箱を取りに行った。俺が救急箱を手に戻ってきたのを見て、古木が顔を顰めた。

「何だ？ 誰かケガでもしたのか」

古木の問いに、俺は仏頂面で答える。

「三人全員。体中に痣があつた」

「え？ どういうことですか」

アキさんが驚いた声を出す。

「それは後で、子ども達が心配なんで風呂場に戻るよ」

古木達にそう言つて俺は子ども達のもとへ戻つた。

少し目を離れた隙に、子ども達はボディソープを一本丸々使い、シャボン玉を作つて遊んでいた。

第七話 最後のヒント

ぬるぬるになった風呂場の床の後始末をして、子ども達を風呂から出し、ベッドに寝かしつけるまでに一時間はかかった。それまで待つていてくれた古木夫婦を居間のソファに座らせ、二人の前にお茶を入れて出す。俺も二人の前に座った。

「ビックリしちゃった。あの子達の身体」

アキさんがそう呟いた。子ども達の身体を見て古木夫婦も絶句していた。その後子ども達の傷の手当てを、二人して手伝ってくれたのだ。

「酷いところで育ったんだな。あの子達」

古木もいつになく真面目な顔で言う。俺は言葉もなく頷いた。

「ねえ、亮君。私たちの子には絶対に虐待しないようにしようね」

「当たり前だろう。あんな酷いこと出来るわけじゃないか。アキちゃんの産む子に」

「やだ、亮君。私の子じゃなくて、亮君と私。二人の子でしょ」

放っておけばいつまでも続きそうなイチャイチャトークを、俺は咳払いして終わらせた。

「うおっほん。それはさておき、アキさん。快のジーンズの中、何か入ってましたか」

「あ、はいはい。コレが入ってました」

アキさんは我に返ったのか、思い出したように手を打った。そして小さく折りたたまれた紙を俺に差し出す。俺はそれを受け取ると、紙を開いた。その紙は白い便箋だった。そこには一人の女性の名前が書かれていた。

『坂田洋子』

俺はその名前に覚えがあった。高校の時の同級生で、美紗子の親友だ。

「坂田洋子って、今井さんの友達だよな」

「ああ。多分な」

「会いに行けって事なのかしら？」

首を傾げたアキさんに、俺は肩を竦めて見せた。

「多分ね」

俺はもう一度紙に目を落とし、裏向けてみたが、他には何も書かれていなかった。

「何だが、拍子抜けだな」

そう言った古木の言葉が、一番今の場の空気を的確に表現していただろう。

俺はとりあえず、坂田洋子に会いに行くと古木たちに告げ、古木夫婦はもう夜も遅いからと自宅へ帰って行った。

翌日。

俺は爽、風、快を連れ坂田洋子の自宅を訪ねた。

坂田洋子の家の住所も電話番号も、同窓会名簿に載っていた。高校を卒業してから何年もたっているのに、引越などで住所が変わっているという危惧もあったが、そんな心配は無用だった。

坂田洋子の家は何処にでもあるような住宅街の中にあった。築十年位のこじんまりとした庭付きの一戸建てだ。庭は綺麗に雑草が抜かれているが、木が三本生えている程度で、他は花一つなく殺風景だった。呼び鈴に応じて、姿を現した坂田洋子は、微笑を作って俺と子ども達を迎えてくれた。

「一ノ瀬君はあんまり変わらないわね。私はすっかりオバサンになっちゃったけど」

ソファアに座った俺と子ども達に、麦茶の入ったコップを出しながら、坂田洋子は笑った。

俺が見る分には、坂田も差ほど高校の時と印象は変わらない。化粧をしているか、いないか位の差に思われた。

「坂田だって変わってないよ。街ですれ違ってもすぐに気づくくらいには」

「それって、褒めてもらってると思っていいのかしら」

「もちろん」

「お父さん。お庭に出て遊んでもいい？」

大人の会話に口を挟んだのは、言わずもがな、風である。

「いいわよ。三人で遊んでらっしゃいな。家の庭には、むしられて困るような植物はないしね」

笑顔を向けられて、風は残りの二人を連れて玄関へ向った。靴を取りに行ったのである。

「一ノ瀬君がここに来たって事は、美紗子の暗号を解いたって事でしょ」

俺が子供たちに庭の外には出るなよと、注意した後、坂田がそう言った。

「いつ、美紗子と会ったんだ？」

「そうね、直接会ったのは一週間前かな。でも、失踪してすぐに電話は貰ってた。だから、あの子達が美紗子の子どもだって事も知ってるし、本当の父親があなただってことも知っている」

俺は惘然とした表情を作った。美紗子が失踪した直後、坂田に俺は美紗子の所在を尋ねたのだ。だが彼女は全く知らないと言った。アレは嘘だったのだろうか。

「どうして言わなかったって顔ね。私はね、一ノ瀬君。一ノ瀬君にどうしても、何があるうとも、美紗子を見つけ出すっていう意気込みがあったら、美紗子が何処にいるか教えるつもりだった」

「……」

「でも私にはそうは見えなかったのよ。確かに一ノ瀬君は美紗子を探していたけれど、見つからなかったらそれでもいい、そんな顔してた」

俺は返答に窮した。坂田の言った通りだった。美紗子が俺に何も言わずに、失踪した理由を、俺は美紗子が俺の能力が嫌になったからだと思っていた。それならば無理に見つけ出して、お互いに傷を広げる必要は無いと、俺はそう考えていたのだ。

「美紗子は言ってた。前に一ノ瀬君と子供の話しになった時、一ノ瀬君、俺は子どもはいらないって、そう言ったそうね」

「そんなこと言ったけ」

俺はついその口に出していた。坂田は眉を上げた。

「覚えてないの？ 美紗子はそれを物凄く気にしてたみたいよ。それで、あなたのもとから離れたって言ってたわ。一ノ瀬君の重荷にはなりたくないって」

「そんな、重荷だなんて。言ってくれてたら俺は……」

俺は、どういう反応を示しただろう。

実際。俺は子どもを作ることは考えていなかった。その理由は簡単なことだ。俺と同じ苦労を、生まれてくる子どもに背負わせたくなかった。それを美紗子に言った事があったのかも知れない。覚えてはいないが……。

俺は小さい頃、自分の持つ能力が特異なものだとは、思っていなかった。だが周囲にいる人間は違った。

今でもはつきり覚えている。俺が今の風達と同じような年の頃、母親に叫ぶように言われたあの言葉を。

『いやっ、近寄らないで。違う。あなたは私の子じゃない。気持ち悪い』

母親がそう叫ぶにはそれなりの原因があったはずだ。でも俺はそれを覚えていない。ただ言われた言葉だけが、今でもはつきりと脳裏にこびりついて、離れないのだ。

その後母は精神に異常をきたし、病院に入った。しばらく父と二人で暮らしていたが、中学に上がる頃に、俺は祖父に預けられた。父もきつと思っていたのだ。俺のことを、気持ち悪いと……。

「一ノ瀬君？」

はっとして俺は坂田に目を向けた。余計な事を思い出していたようだ。今はこんな感傷に浸っている場合ではない。

「悪い」

「別に。でもちょっと安心したかな。子ども達をつれてきた一ノ瀬君の顔。すっかりお父さんの顔になっていたもの」

「そうか？」

「そうよ。私一ノ瀬君は子どもが嫌いだと思ってたから、美紗子が一ノ瀬君に子どもを頼みたいって言った時、本当に大丈夫かしらって思ったもの」

「でも、美紗子はどうして俺に子どもを頼みたいなんて言ったんだ」俺の問いに、坂田は一瞬しまったというような顔をする。俺はそんな坂田に追い討ちをかけることにした。

「美紗子が子どもたちを自分の手元から放すと言うのが、そもそも信じられないんだ。美紗子なら例え離婚しても、自分ひとりで何が何でも子どもを育ててみせるっていうだろう。そういう性格だからな」

俺はそこで一旦言葉を切る。坂田の顔から笑顔が消えた。

「だから俺は最初に電話を貰った時から考えていたんだ。美紗子は今、自分の意思じゃどうにもならない問題を抱えているんじゃないだろうか。一度捨てた男を頼るしか出来なくなるくらいの、危機を迎えている。そう言いかえてもいい」

「ふーん。結構考えてたんだね。一ノ瀬君も」

「坂田って、前から思ってたけど俺をバカにしてるだろ」

「バカにはしてないわよ。親友を取られて拗ねてるだけ」

笑顔で返されて、俺はまたも憮然とした表情を作った。

「まあ、美紗子に降りかかった危機がどんな物かは、会ったら分かることよ。私には美紗子を救うことはできないもの。美紗子が幸せになれるように、ちょっとしたお手伝いすることくらいしか」

「で、坂田は美紗子に、どんなちよつとしたお手伝いを頼まれたんだ？」

俺がそう言った時だった。

「あ、危ない」

坂田が急に立ち上がった。坂田は庭に目を向けている。俺も背にしていた庭を振り返った。

「あのバカ」

ついその言葉が出た。庭木に風がよじ登っていた。そう高くはないが、細い枝に足を絡ませた子どもは今にも落ちそうだ。もし下手な落ち方をすれば、どこかの骨を折るかもしれない。

俺はガラス戸を開いて風の元へ駆け寄ろうとした。

「風」

俺の声に驚いたのか、風が手を滑らせた。落ちる。

俺は咄嗟に能力を使った。坂田がいることなど頭から吹き飛んでいた。

風の落下が止まった。重力を無視して、風の小さな身体は地面から二十センチくらい上に浮遊している。

俺はほっと息を吐き出した。

「大丈夫なの」

坂田の慌てた声に、俺は振り向いた。その背後で風のイテツと言う声が聞こえる。俺が注意を逸らしたから地面に落ちたのだ。まあ、少しくらい痛い目をみてもいいだろう。

「ああ、大丈夫」

「はあ、良かった。子供って身体が柔らかいから、なかなか大怪我にはならないのよね」

そう言つて、坂田はほっと胸を撫で下ろす。

どうやら坂田には風が空中で一旦停止したのが見えていなかったようだ。坂田から見たら風は、俺の背に隠れていたのだろう。

「大丈夫？」

坂田が走り寄ってきて、座り込んだ風に手を差し出した。

「ごめんなさい」

落ちた拍子に枝を折ったらしい。手にしていた枝を差し出して、風が殊勝に謝った。坂田はその枝を受け取る。

「別にいいわよ。怪我しなかったら。でも、もう勝手に木に登っただめよ。落ちたら危ないんだから」

風を立たせた後、坂田は腰に手を当てて、風を叱った。俺が口にしたかった言葉を先に言われて、俺は言葉を搜した。

「風、何でお前は木に登ったんだ？」

「あのね、あそこにね。鳥がとまってたの」

答えたのは快だった。

「それで捕まえようとしたのか？」

俺がそう問うと、風は首を横に振った。

「ううん。近くで見ようと思って」

俺は溜息を吐いた。好奇心が旺盛といおうか、なんといおうか。

「もう、木には登るなよ。その約束を守るんだったら、もう少し遊んでいていいぞ」

「ホント」

顔を輝かせて、三人が俺を見上げる。俺は重々しく頷いた。

「やったー」

そんなに嬉しかったのか？ と疑いたくなるほどの大声で、子ども達は喜んだ。

「まあ、一件落着きたいだし。部屋に戻りましょうか」

坂田に言われて、俺は頷いた。その拍子に気づいた。靴下のまま、庭に出ていた事に。

「あ、一ノ瀬君。部屋に上がる時は靴下脱いでね」

振り返った坂田にそう釘を刺されて、俺は苦笑せざるをえなかった。坂田の言うとおりに靴下を脱いで、俺は部屋へ上がった。

出された麦茶の最後の一口を飲み込んだとき、坂田が口を開いた。「美紗子に、一ノ瀬君が来たら言ってほしいと言われたことを言うわね」

俺は頷いた。坂田は神妙とも言える顔つきで、言葉を発した。

「頭をみなさい」

「は？ どういう意味だそれ」

「さあ？ 私には分からないわ。美紗子にはそれだけを言えばいいって言われてるから。ヒントはコレで最後だから、分からなかったらもう美紗子とは会えないわね」

坂田の言葉に眉を顰めて、俺は言った。

「美紗子に、見つけられなかったらバツとして、一生子ども達の面倒を見ると言われたよ」

「それが嫌で、一ノ瀬君は美紗子を探しているわけ？」

坂田の顔つきが一瞬剣呑な物に変わった。俺は首を横に振って、その問いを否定した。

「違うよ」

「そう。なら良かった。私としては早く美紗子に会って欲しいと思っているの。美紗子もこんな面倒くさいことしないで、素直に一ノ瀬君に会いたいわって言えばよかったのにね。美紗子も妙なところで強情だから。……時間がないのに」

俺は坂田の目を見た。坂田が一瞬怯んだ顔をした。

「時間が無いってどういうことだよ」

「ああ、気にしないで、いや、気にした方がいいのかしら、この場合。ああ、もう、言っちゃったからしょうがないか。美紗子にはね、もう時間が無いの。だから。一ノ瀬君。お願いだから早く美紗子を見つけてやって」

かなり慌てている坂田に、少し圧倒されつつ俺は頷いた。

「でも、そこまで言うなら俺に美紗子の居場所を教えてくれたらいいじゃないか」

「そんなことしたら、美紗子に化けてでられるわよ」

苦笑交じりに、坂田が言った。

「……そう、かもな」

俺はそれだけ言って立ち上がる。

「ありがとう。今日はこれで失礼するよ」

「うっん、お構いも出来ませんで」

俺たちは顔を見合わせて、少し笑った。互いに気を使っているの

が可笑しかったのだ。大人になったな、俺たち。そんな感じである。
俺は子ども達に声を掛け、坂田の家を後にした。

第八話 最後の回答

子ども達を連れて事務所に戻り、俺は一人事務所の机に肘をついた。子ども達は隣の住居スペースで大人しく遊んでいるはずだ。

そして俺は、坂田に言われた最後のヒントを思い出していた。

「頭を見なさいか……」

どういう意味だろうか。俺にはさっぱり分からなかった。

また古木夫婦の助力を乞うかな。そう思ったが、俺は頭を振った。最後の謎くらい自分で解決できなくては、探偵の名が廃る。

考えているうちにふと思いついた事があった。あの暗号である。

俺はあの時何か、違和感を覚えたのだ。変わった言い回しをしている。そんな風に思ったはずだ。

俺は机の引き出しに入れていた紙を取り出した。暗号の書かれた紙だ。俺はそれを暫く眺めて、アツと声を上げた。

急にひらめいたものがあつた。頭を見なさい。なんと単純なことだったのだろう。暗号文の違和感もコレが分れば解消された。なんとかこの答えに合わせる様に作られた文だったから、違和感が残ったのだ。

俺はすぐさま電話帳をとり出して、開いた。その場所はきつと電話帳ですぐに調べる事が出来るだろう。

もう、夕方だ。美紗子に会うのは明日にしよう。

俺はそう思い、そして美紗子のことを思った。美紗子は今どうしているのだろうか。不安が渦巻いていた。本当に美紗子はこの場所にいるのだろうか。いるとしたらなぜ？ 俺は悪い想像をして、首を横に振った。

そして俺は坂田の言葉を思い出していた。彼女は確かにこう言った。美紗子には時間が無い。そして、化けて出られると。

バーのママ、澤田も言っていたではないか。美紗子は病気かと疑うくらい痩せていたと。

俺は溜息を吐いた。最近溜息ばかり出る。

今やっと美紗子に近づいた。俺の元から離れて、俺の子を産んだ美紗子。

俺はもう子ども達が俺の実の子だということに、疑いを持っていなかった。子ども達のあの力。アレは俺の能力を受け継いだとは思えなかった。

俺は高校の時、美紗子に言った言葉を思い出していた。

近くを走っていく子どもを見て、子どもって可愛いわよねと言った美紗子に、俺はこう答えたのだ。

『確かにかわいいけど。俺は、子どもは要らないな。自分の力を受け継いだ子どもが生まれるかもしれないし、俺はそんなのめんどね』

その時の美紗子の、なんともいえない顔を今はつきりと思い出していた。もしかしたらあの時にはもう、美紗子は自分のお腹の中に子どもが宿っていることを知っていたのだろうか。知っていて、俺の反応を窺ったのだろうか。もしそうなら俺は、一生悔やむ事になるだろう。

もしあの時、美紗子が俺に打ち明けてくれたら、俺はそりや驚くだろうが、受け入れられたと思う。子どもは嫌いではなかった。こんな能力さえなかったら、子どもは欲しかったのだ。

そこまで考えて、俺は苦笑した。もしあの時とか、そうしていたらとか、そんなことを考えていても意味が無いことに気づいたのだ。あの時、美紗子は俺に子どもの事は告げなかった。俺も居なくなつた美紗子を探そうとはしなかった。

互いに別の思いを抱え、すれ違っていたとしても、今の自分が昔の自分に助言することは出来ないのだ。

大切なのは現在だ。

美紗子の気持ちを聞くのは明日になれば出来るだろう。あの暗号の意味があっていれば、俺は確実に美紗子と対面することが出来るのだから。

七年ぶりの再会は一体どうなるのだろうか。
美紗子に会って、俺は最初になんと言えはいいのだろうか。

第九話 再会

翌日は晴天だった。暖かな春の朝を、俺は緊張の面持ちで歩いていた。

目的地は事務所からそう遠くない場所にある。バスに乗って、目的地近くのバス停で降りると、俺はその建物を見上げた。『梶野病院』と門の近くに緑色で書かれた看板がたっている。

美紗子の最後のヒントは『頭を見る』だった。だから俺は暗号の頭文字を拾って読んだのだ。

そして気づいた。

最初の文字を並べるとこうなる。

『かじのほすびたる』

ホスピタル。つまり病院だ。

なぜ、わざわざホスピタルなんぞという言い回しをしたのか。それは何となく分かる。美紗子はさとうを抜けと書いた後で、病院という文字に、抜かなければならない『う』という文字が含まれていることに気づいたのだろう。だから、違和感のある文章が出来上がった。詰め甘い美紗子がやりそうな失敗である。

俺は受付で美紗子の名と見舞いに來た事を看護師に告げた。

手には小さな花束を持っている。病院の近くにあった花屋で購入したものだ。

「まあ、今井さんのお見舞いですか」

驚いた口調でそう言われて、俺は戸惑った。それが表情に出たのだろう。看護師は笑って、こう言った。

「いやだ。私ったら。すみません。今井さんに初めて面会の方が来られたので、嬉しかったです。今井さんは個室の205号室にいらっしゃいます」

「どうも」

俺はそれだけ言って、軽く頭を下げると、看護師に教えてもらっ

た病室に向った。

美紗子の病名を、俺はもう知っていた。

病院に電話をかけて、美紗子に今日来ることを伝えていたのだ。さして迷うこともなく、俺は205号室の前に着いた。

ノックをする。

ノックをする手が震えているのが自分でも分かった。

情け無い。

ドアの向こうから、どうぞと言う声が聞えて来た。胸が詰まるような感覚が俺を襲った。俺はゆっくりとノブに手をかけ、ドアを開いた。

白を貴重とした病室は、太陽の光で明るく照らし出されていた。開いた窓から、少し熱気を含んだ風が、白いカーテンを翻し入ってくる。

そして。部屋の中央に据えられたベッドの上に、美紗子はいた。

俺は目を細めて、美紗子を見た。驚くほど痩せていた。高校の時の面影は無い。骨と皮だけの様に細くなっている。

目を逸らしたい感情に従おうとした時、美紗子が笑った。

俺は目を見張った。美紗子だ。そう思った。

笑顔は七年前と変わらぬ明るさを称えていた。

「七年ぶりね、涼」

「ああ」

美紗子の声に、疲れの色が見えた。俺は目を閉じて、涙が溢れそうになるのを堪えた。

美紗子は、癌なのだ。すい臓癌らしい。癌はいたるところに転移し、あと一ヶ月の命だそうだ。

俺は目を開けた。こんなところで泣いているわけにはいかない。痛々しい姿の美紗子の横に立った。持っていた花束を手渡す。嬉しそうにソレを美紗子が受け取った。

その時である。

（やっと逢えた）

美紗子の声が頭に響く。俺ははっとした。

美紗子の心の声が頭の中に響いたのだ。

予想外のことだった。俺はいつも力を制御している。その制御する力がはずれたのかもしれない。美紗子に逢って、動揺して。

「以外と早かったのね」

（ああ、涼だ。本当に涼なんだ）

美紗子の声が二重に聞こえてくる。美紗子は俺の手を握り、俺に折りたたみ椅子に座るように促した。美紗子に言われて、俺は持ってきた花束をベットの脇にある引き出しの上に置いた。

「子ども達は元気？」

「ああ、元気だよ。古木、覚えてるか？ アイツが最近結婚してさ。その奥さんに今は預けて来てるんだ」

「そう。元気にしてるんだ。良かった。それにしても以外だな。古木君が結婚してるなんて」

「奥さん、若くて美人だよ」

「ふふ。悔しいんでしょう。先越されて」

楽しそうに笑って美紗子は少し疲れた様に、背中にそうように置かれた枕に身体を沈めた。枕をその背に添えていないと、起きられないのだと、美紗子は苦笑した。

「ゴメンね、涼。勝手に子供産んで」

美紗子が少しの沈黙の後、そう言った。

色の悪い顔が下を向く。

「でも、産みたかったのよ。涼が子ども作りたくないって言った気持ちも分かるから。一人で産もうって決心して、涼の前から姿を消したの」

（でも、本当は離れたくなんてなかった）

「バカみたいよね。結局一人でいることに耐えられなくなって、結婚して」

（幸せになんてなれるはずがなかったのに。涼から離れて、幸せになんてなれるわけがなかったのに）

美紗子が不意に顔を上げ、淡く微笑んだ。俺はただ、美紗子を見つめることしか出来なかった。

「結局結婚しても、子ども達を傷つけることにはしかなかった。自分が病気だつて分った時、本当に怖かったの。子ども達を、あの男のもとに置いてなんて死ねないと思った」

（あの時にはもう、涼のことしか思い浮かばなかった）

「離婚して、結局私は一度捨てたあなたに、助けを求めるしかなかったの」

（本当はただ、逢いたただけだった）

「でも、いきなりあなたに助けてなんて言えなくて。そこであなたに依頼することを思いついたの」

（死ぬ前にもう一度）

「本当に、本当にあの子達はあなたの子どもなのよ。嘘じゃ無いわ」（もう一度あなたに逢いたかった）

俺は頷いた。

「分かってるよ。あの子達の能力は、俺のものと一緒にだった」

「そう。私も驚いた。まさか。本当にあなたの能力を受け継いで生まれてくるなんて」

（……でも私は嬉しかった。だって、何より涼の子だっていう証になるんだもの）

「ねえ涼。私が死んだら。あの子達引き取ってくれる？」

美紗子は細い手で、縋る様に俺の腕を掴んだ。美紗子の爪が腕に食い込んで痛い。それ程強い力だった。

「あの子達にはもう、あなたしかいないの。勝手なお願いだって分かっている。あなたに黙って勝手に産んで、勝手に育てて、本当に悪いと思ってる。でも……」

美紗子は顔を伏せた。美紗子の目から涙がこぼれた。

「お願い。私が死んだら。あの子達にはもう……あなたしかいないのよ」

嗚咽が美紗子の喉から漏れた。俺はぐっと唇をかむ。

（お願い、涼。お願い）

「……当たり前だろう。俺が、子ども達を見捨てると思っのか？」

「涼……」

「お前は本当に勝手だよ。子どもが出来た事俺に言いもせず、勝手にいなくなつて。やっと逢えたと思つたら、もうすぐ……死ぬだなんて」

俺は美紗子の腕を引っ張つた。そして美紗子の細くなりすぎた肩を抱いた。

「本当に勝手な奴だよ。お前は……」

「ごめんなさい」

（ごめん。ごめんね、涼）

「なあ、本当なのか？ 本当にお前……」

癌なのかと最後まで口に出来なかつた。

美紗子の身体を見れば、美紗子の病名が嘘では無いことは分かる。でも、問わずにはいられなかつたのだ。俺には、問わずにはいられなかつた。俺が言おうとしたことを察したのか、美紗子が俺より先に口を開く

「癌よ。もうすぐ死ぬわ。もう体中に転移して治す術はないって。

私ももう、あきらめた」

（本当は、死にたくなんて無い）

（せっかく涼に逢えたのに）

「どうしてっ……どうしてお前なんだよ。どうしてお前が……」

癌にならなきゃならないんだ。そう言い切る前に俺は口をつぐんだ。涙が、溢れそうになった。

「泣かないでよ。涼」

「泣いてねーよ」

俺はそう言つて一層強く美紗子を抱きしめた。泣いていることを、俺は美紗子を強く抱きしめることで、誤魔化そうとしていた。

（愛してる。涼。本当はずっとあなたと一緒にいたかった）

「痛いよ。涼」

美紗子が俺の腕の中で身じろぎする。

（こんなに好きなのに、私が臆病だったばかりに、離れ離れになってしまった）

（……何もかも私のせいだ）

「いい加減に、離して」

（本当はずっとこうしていたかった。本当はずっとこうして、涼の腕の中で守られたかった）

「美紗子。俺もずっと好きだったよ。ずっと……お前を探さなかったのは、お前が俺の能力が嫌になったんだと、そう思ったからだ」
そう言ったら、美紗子が息をのんだ。

「涼。あなた、私の心読んだわね。……ダメって言ったじゃない。勝手に人の心読むなんて。本当に……バカなんだから。あなたの能力がいやになるなんて、そんなこと、思うわけないじゃない」

（私は能力も含めて、涼を好きになったのに……）

「結婚しよう、美紗子」

俺は美紗子を身体から離して、美紗子の病に犯されても、なお澄んだ目を見つめた。衝動的に口走ったわけではない。高校生の頃から、ずっと抱えていた思いだった。美紗子は一瞬動きをとめ、驚きの表情を作った。

「バカなこと言わないで」

（どうして？ 私はもう死んでしまうのに）

「結婚なんてしたって、無意味でしょ」

「そんなこと無い。俺はもう、後悔したくない」

「涼」

美紗子が俺に戸惑いの視線を向ける。そんな美紗子に俺は、ゆっくりと語りかけるように言った。

「愛してる。美紗子」

美紗子が息を飲んだ。

「もう、俺の前から逃げ出さないでくれ。一度くらい、俺のわがままに答えてくれよ」

美紗子の目からまた涙が流れた。

「私も……私も、愛してる。涼」

「結婚しよう。美紗子」

俺はもう一度そう言った。

「死ぬなんていうな。俺のために、出来るだけ長く生きてくれ」

美紗子は頷いた。涙で顔をぐしゃぐしゃにして、それでも頷いてくれた。

俺はそんな美紗子を、もう一度強く抱きしめた。

第十話 これから

夏が過ぎ、秋が来て、もうすぐ冬。そんな時期に、美紗子は亡くなった。

俺と美紗子は七年ぶりの再会を果たした後、すぐに結婚した。式はもちろん出来なかったが、俺達はそれで良かった。

残り一ヶ月といわれていた美紗子は、半年も長く生きてくれた。俺はその間仕事を休んで、ずっと美紗子のそばにいた。

美紗子は俺と三人の子ども達に囲まれ、最後まで笑顔で、亡くなった。俺はそれだけで満足だった。

三人の子どもも、母親の死を受け入れた。

子ども達が死というものをきちんと理解しているのかは分からないが、ただ、もう美紗子に会うことは出来ないのだと、本能で悟っているようだった。

「お父さん。早く」

呼ばれて俺は顔を上げた。俺の前を走っていた子ども達が、足をとめて俺を待っている。

「分かった」

俺はそう言って走り出した。冷たい風が頬をすり抜けた。もう、冬だ。あと数日で今年も終わる。白い息を吐き出しながら、俺は子ども達の待つ場所へ向って走る。

美紗子。俺は幸せだよ。子ども達と一緒に、俺はお前の分まで生きていく。

「あー、雪だ」

「うわあ、綺麗だねえ」

「雪だるま作れるかな」

子ども達の声が、空に向って放たれた。

ひらひらと舞い落ちてきた白い雪が、俺の掌に落ちて溶けた。

「わあ、いっぱい降ってきたあ」

子ども達が三人同時に歓声を上げた。
その声につられて見上げた雪空に、美紗子の笑顔が、見えた気がした。

第十話 これから（後書き）

（後書き）

……最後まで読んでいただきありがとうございます。

あらすじにも書きましたが、このお話は『一ノ瀬探偵事務所事件ファイル』（短編）として投稿している小説を、加筆修正し、ジャンルを推理からその他に変え、連載形式の方が読みやすいと多数ご指摘いただきましたので、新に連載形式にて発表させて頂いたものです。その際、題名も『一ノ瀬探偵事務所事件ファイル』から、執筆中につけていた仮の題名『涼風爽快』へと変更いたしました。

一ノ瀬探偵事務所事件ファイルに評価、感想を下さった皆様、ランキングに投票していただいた皆様。本当にありがとうございます。『一ノ瀬探偵事務所事件ファイル』は1月17日を持って削除させていただきます。皆様の評価、感想を胸にこれからもがんばります。

改めて小説を投稿する際、あちこち修正しました。少しでも読みやすくなっているとよいのですが。

実は私、一人称小説を書くのはこれが初の経験でして、しかも最後まで書くことの出来た小説はこれが二つ目だったりします（汗）
なにはともあれ、せつかくの後書きですので、裏話でも。

『一ノ瀬』の後書きでも書きましたが、このお話し、実は病院でのシーンから作っていったお話だったりします。（それにしても私が恋愛を描くとどうしてこうクサクなるのか（苦笑い））

その割りに、書いていて一番楽しかったのは、涼と子ども達のからみのシーンでしたが（笑）

そして、第十話。最初投稿しようとしたら、六百字足りてなくて投稿できなかったんです。ホント焦りました。幸いあと四文字だったので、悩んだ末、地の文以外で五文字足しました。（その後少し修正したのもう少し増えているかもですが）どこかは、まあ、ご想像にお任せします（笑）

それでは少し長くなりましたので、この辺で。

最後になりましたが、ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました。うございました。

少しでも面白いと思っていただけたら幸いです。

愛田 美月でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4611d/>

涼風爽快

2010年10月8日15時54分発行